



清水孝之 校注

新潮社版

新潮日本古典集成 (第三二回)
與謝蕪村集



定価 一八〇〇円

昭和五十四年十一月五日 印刷
昭和五十四年十一月十日 発行

校注者 清水孝之

発行者 佐藤亮一

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 株式会社 新潮社

〒一六二 東京都新宿区矢来町七一
東京03(二六六)五一(業務)
電話 東京03(二六六)五四(編集)
振替 東京 四一八〇八

装画 佐多芳郎
組版 シーティエス大日本
製本 新宿加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

凡例	三
----	---

蕪村句集	九
------	---

俳詩	
----	--

北寿老仙をいたむ	二四一
----------	-----

春風馬堤ノ曲	二四五
--------	-----

澱河ノ歌	二五三
------	-----

新花つみ	
------	--

発句	二五七
----	-----

文章	二九四
----	-----

文章篇	
-----	--

名月摺物ノ詞書	三三三
---------	-----

天の橋立ノ図賛	三四
---------	----

宋屋追悼ノ辞	三五
--------	----

其雪影ノ序	三六
むかしを今ノ序	三七
洛東芭蕉庵再興ノ記	三九
春泥句集ノ序	三三
俳諧桃李ノ序	三七
五車反古ノ序	三八
弁慶ノ凶贊	四〇
馬提灯ノ凶贊	四一
夢ノ説	四三
歳末ノ弁	四三
解 説『蕪村句集』と『新花つみ』の成立	四五
付 録	
與謝蕪村略年譜	三九五
季題一覽(蕪村句集・新花つみ)	四〇五

凡 例

本書は、日本文学史上稀に見る独創的詩人であった與謝蕪村よきの、優れた文学的業績の大概を示したものである（他方で池大雅いけのたいがとともに近世南画の大成者でもあった）。その作品を読みやすく味わいやすい形で、読者に提供する意図のもとに編集注解を試みた。

〔本文〕『蕪村句集』『新花つみ』のほか、俳詩三篇と俳文十三篇を収めた。それぞれ初版と思われる刊本ないし自画賛・写本に拠って忠実に翻刻することに努めた。ただし仮名遣いは歴史的仮名遣いに、漢字・仮名の字体は通行の字体に改め、また明らかな誤字を訂正した。

一、発句（俳句）・俳詩の表記は、清濁を分ち、漢字に振仮名をつけたが、作者の意図、詩としての視覚的效果を配慮して、送り仮名は底本のままである。

一、『蕪村句集』と『新花つみ』発句の部には、各句頭に通し番号をつけて頭注に対応させた。俳詩には各聯の頭部に通し番号をつけたが、主として注解の便宜のためである。

一、文章（俳文）は、もっぱら読みやすさを考慮し、送り仮名を補い、段落を分けた。また、わかりにくい箇所には傍注（色刷り）として口語訳を掲げた。『新花つみ』は、底本の振仮名や本文改訂のさまを、すべては示し得なかった。影印本『註新花摘』（大儀義雄・清水共編、昭和二十八年刊）を参照されたい。

〔注解〕本文の解釈と鑑賞の手引として、蕪村の文学的魅力を掘り起すような心がけたが、特に印象

批評に陥らぬよう、客観的考証に努めた。

一、頭注欄に発句（俳句）の現代語訳を、句番号（アラビア数字）の下に色刷りで掲げた。俳句や詩の直訳は無意味だから、なるべく簡潔に意訳を心がけたが、全句には及ばなかった。

一、鑑賞注は、鑑賞の要点、和漢の典拠を挙げることに努めた。また推敲過程を考える参考として句形の異同を注した。その場合、句下の出典欄に記したものは「『』」を省いた。

一、頭注欄に多く引用した書名を挙げる。俳諧辞書『俳諧類船集』『類船集』と略称、梅盛著）、中村俊定校訂『芭蕉俳句集』（岩波文庫、昭和四十五年刊）、其角『五元集』（旨原編、延享四年刊）、召波『春泥句集』（蕪村編、安永六年刊）、几董『井華集』（几董編、寛政二年刊）等である。

一、本文の下欄には、主としてその句が『蕪村句集』にまとめられる以前に発表されている句稿・撰集等を「出典」として記した。一般読者には作品の初出年次を知る手掛りとして利用されたい。

明和三年以降の三葉社・夜半亭社中句会記録（主として百池筆録。寺村家蔵）のうち主なものは次の通りである。

「夏より」（三葉社中）明和三・六・二／六・一〇、明和五・五・六／七・九・二六。「高德院発句会」（夜半亭社中）明和七・一〇／八・一一・三。「月並発句帖」安永三・八・一〇／六・五・一〇、天明三・四・二四／一〇・一〇。「耳たむし」安永元・八・四／一一・三、安永二・一・二七／四・四、天明三・二・二三。「紫狐庵聯句集」明和八年（『明和辛卯春』、安永元／四年歲旦吟。「夜半亭発句集」（安永五年発句集）は安永五年度の蕪村発句四〇句。

右は未刊稿本であり、京都大学頼原文庫に写本が存する。頼原博士は創元社版『蕪村全集』（第一巻、昭和二十三年刊）において、年次の明確なものを年次句稿として表示された。例えば「夏より」明和六年三月十日召波亭句会の個所に出る『蕪村句集』哭の句は「明和三年句稿」とする。

寺村家蔵「落日庵句集」「夜半叟句集」（略称「落日庵」「夜半叟」）は乾木水編『未刊蕪村句集』（昭和七年刊）に拠った。蕪村個人の句集である。田中王城編『召波居士蕪村翁の墨蹟』（大正八年刊）はすべて明和八年召波

没前のものであるから、年次を知る便宜として本集では「召波資料」と略称した。また「蕪村遺稿」（稿本）は水落露石刊本（明治三十三年刊）もあるが、塩屋忠兵衛輯稿本（写本。河東碧梧桐編『蕪村新十一部集』に翻刻、昭和四年刊）に拠った。また最近紹介された尾形仇編『蕪村自筆句帳』（昭和四十九年刊）は「句帳」と略称し、同書に集録された諸家蔵「断簡」と「武田本」所収句は「句帳」として区別した。

「几董句稿」（天理図書館蔵、俳書叢刊第三期に翻刻）のうち、「日発句集」は明和七・八年の几董句集だが、その最初に蕪村の二三句が記録されていて、すべて明和七年六月以前の作である。また「几董句稿二」は安永二・三年、「同四」は安永五・六年、「同五」は安永六年の句稿であり、「連句会草稿」は安永八・四・20ノ九・12・5に至る檀林会の句録である。

その他、三宅嘯山編『俳諧古選』（『古選』と略称、宝暦十三年刊）、同『俳諧新選』（『新選』と略称、安永二年刊）、朝陽館五晴編『津守船』初篇（『津守船一』と略称、安永五年刊）三篇（『津守船三』と略称、安永九年刊）。後世の類題集は嘉会室亨編『新五子稿』（寛政十一年自序）以外は誤りが多いので省略した。

〔参考文献〕

一、発句（俳句）に関しては、次の諸書を参照した。岩間乙二『蕪村発句解』『発句手爾葉草』（天保四年刊）、正岡子規ら輪講『蕪村句集講義』『講義』と略称、刊本、明治三十三ノ三十六年刊）、木村架空『蕪村夢物語』（大正九年再版）、頼原退蔵『蕪村全集』（『全集』と略称、昭和二十三年刊、創元社版）。最近のものでは最も句数の多い暉峻康隆氏「蕪村集」（昭和三十四年刊、日本古典文学大系58）のみを参照した。かつて先人の評釈書を年次順に検討することによって、蕪村俳句を解釈し鑑賞する作業を行ったので、その他の諸家の説も冥々の裡に影響しているかもしれない。御海容を乞う。

一、文章（俳文）については、ほとんど評釈書類はない。傍注・頭注ともに松尾靖秋氏『近世俳文集』（昭和四十七年刊、日本古典文学全集42）の業績に負うところが多い。

〔解説〕 本文篇の後に二章の解説を付載した。第一は『蕪村句集』が通説のように門人几童の編集ではなく、蕪村の自撰と編集に成るものであったことの論証である。今後『蕪村句集』は自撰句集として、トータルな解説と研究が行われるべきかと思う。第二は『新花つみ』の背景を調査することによって、詩人蕪村の稀有な方法と主題とを解明しようとしたものである。そのうち最後の「夏発句の深層心理」は、「国文学解釈と鑑賞」昭和五十三年三月号に発表した拙稿『新花つみ』試論』に基づく。

蕪村は、宋阿——其角——芭蕉と遡る歴史的系譜において、明和・安永（十八世紀後半）期の蕉風復古運動の中心人物として位置づけられる。しかし俳詩三篇や『新花つみ』の素晴らしい創造性を考えると、俳諧師蕪村は「当時の職業俳諧師とは異質の、異端孤高の俳諧師であった」（富山奏氏校注『芭蕉文集』凡例）と言えよう。

なお解説にはなるべく蕪村書簡を引用すべく心懸けた。書簡は『蕪村集』（昭和四十七年刊、古典俳文学大系12）の書簡編（大谷篤蔵氏担当）を利用して頂いた。

〔付録〕 巻末に付録として「蕪村略年譜」と「季題一覧」を付載した。本文と照合することにより、読解を深める一助にもと思って作成した。「略年譜」は頼原退蔵校註・清水増補『與謝蕪村集』（日本古典全書、昭和三十二年刊）の年譜を修訂したもの。索引を兼ねた「季題一覧」は今回新しく試みたもので、蕪村の季題観や素材の中の季題を考える資料になろうかと思う。

因みに昭和五十四年は蕪村の百八十五回忌に相当する。

與謝蕪村集

燕
村
句
集

初版本の題簽は「蕪村句集」（内題「蕪翁句集」とあったと思われる。半紙本二冊。夢太序、田福跋。「几董著」とあるが著とあることについては解説参照。本文板下は几董筆。句数八六六句。天明四年（一七八四）十二月一周忌に当り京都寺町五条上ル町汲古堂刊。大阪塩屋忠兵衛版は後刷り、明治に至るまでかなり版を重ねた。昭和四十六年山本唯一氏の『蕪村句集影印索引』も刊行された。藤井乙男博士は「蕪村の傑作は総べて網羅したかの観あるまでに、その編選は正鵠を得てゐる」（改造社版『俳句講座』六、昭七）と評された。

正岡子規の俳句革新は明治二十六年（一八九三）板本『蕪村句集』の発見から始まり、やがて『俳人蕪村』（明三三）前後には全俳壇に蕪村ブームを巻き起した。『蕪村句集』の翻刻も旧派の春秋庵幹雄評点『校蕪村句文集』（明二九）を最初として、阿心庵雪人編『校註蕪村全集』（明三〇）は頭注を加え、秋声会編『蕪翁句集拾遺』（明三〇）は三〇九句を補遺、大野洒竹編「蕪村句集後編」（『蕪村晩台全集』明三二）は五七五句と増加された。『蕪村遺稿』（明三三）については解説に触れるが、蕪村発句の補遺作業は岩本梓石編『標註蕪村俳句全集』（明三九）に集成され、大正末期の河東碧梧桐・乾木水らの本格的蕪村研究期の成果として頼原退蔵博士の画期的な『蕪村全集』（大一一四）が完成した。最近の『蕪村集』（昭四七）の発句篇（大谷篤蔵氏担当）はすべて二八五二句を登録した。

蕪村発句の評解は天保期の岩間乙二に始まり、明治に渡部霞江女の『夜半亭蕪村句解の緒』（明三〇）があるが句数は二〇二句に過ぎない。明治三十一年（一八九八）一月開始の『蕪村句集講義』は、子規の死にもめげず、輪講は三十六年四月に完了した。その後現在に至るまで、『蕪村句集』の全評釈はない。

一「洛」は京洛の約。明和七年春、京都において蕪村は師宋阿の亭号「夜半亭」二世を継いで宗匠となった。
二 非常に数の多いこと。十萬億土等を意識して言った。現在知られる発句数は約二千八百句余り。
三 死んで仏となつて。「夜台に枕して」は墓穴に土葬にされて。

四 もはや一句も吐くことはない。私は八万四千の法を説いたが、私の悟りの内容は文字では説明できないことをいう。
五 高井凡圭の子。明和七年蕪村に入門。春夜楼を号し、天明五年江戸に下り蓼太の後見で夜半亭三世を襲名。寛政元年没、四十九歳。「頓て」は、すぐにの意。

六 梵語Kalindaの漢訳。衣服。ここは衣鉢を伝えて。七 京都の寺町五条上ル町の書店汲古堂の主人、田中庄兵衛。「佳棠」は俳号で晩年の蕪村門人。跋文参照。八 一周忌に当り木長くその法を慕う形見とする。「小祥忌」は一周忌。「祥」は凶服をぬいで吉服に着かえる意。「忌辰」は忌日。

九 故翁。「叟」は老人の敬称。
一〇 遠く江戸の私の所へ手紙をよこして。
一一 二日付はないがこの序の執筆は天明四年。五十年前として享保十九年の頃江戸で両者は交遊があった。

「蕪村を悼 ちからなき山の端見たり朧月 蓼太」
三 芭蕉の門人服部嵐雪の庵号。延享四年大島蓼太が三世を名乗り、中興期の江戸俳壇を牛耳った。天明七年没、七十歳。

洛 夜半亭蕪村老人、とし頃海に對し山に嘯き、花に眠、鳥

に寐覺て、句を吐事十萬八千、その秀たるものは、ひとの

耳底にとゞまり、諸集にあらはる。惜むべし、去年の冬、

衰病終に夜台に枕して一字不説。高弟凡董頓て金婆羅華を

つたへて、門人のため一集を撰、書肆佳棠にちからをあは

せて、ことし小祥忌辰の永慕とす。はた子と亡叟とまじは

りひさしきまゝに、遙に武江に告て、それが序を需む。予

又わすれめや、旧識五十余年。

雪中庵

蓼

太

一 内題。蕉翁に準じて几董がかく名づけたもの。

1 年老いてめでたい春を迎えるのだから、蓬萊の山祭をして不老不死の仙人にあやかりたい。

日本の民間習俗の山遊びを念頭におき、中国の神仙思想により正月にふさわしい蓬萊の「山まつりせむ」と興じた洒脱な句。安永四年六十歳の作。季題は「初春」。

◇ほうらい 蓬萊山。中国の伝説で東方海上に浮び神仙の住む霊山。それを型どった正月の飾り物、蓬萊飾。

2 年も明けて初日が輝きそめた。それも今朝は、節分に插した門口の鰯の頭から、一きわ神々しい光が家中に満ちわたってきた。

上方のいろはかるたの文句「鰯の頭も信心から」(『せわ焼草』に「いわしの頭も信仰から」)の絵解きを句にした即興。明るいうーモアがある。季題は「初日」。

◇鰯のかしら 柊に鰯の頭を刺して、門口や窓に插すのは節分の習俗で、厄鬼払いの縁起。節分は古くは大海日に行われた(『日本水代蔵』巻六参照)。

3 貧しいその日暮しでも、一家息災で新年の雑煮を祝うのはおめでたい。三杯もおかわりして満腹すると、長者らしい大らかな気持になることよ。

『続俳家奇人談』の評に「風姿卓然。清貧の理想境。◇かゆる「換ふ」「換ふる」が「換ゆ」「換ゆる」と転じた。◇長者ぶり 長者(福德者)らしい振舞い。

二 まがき。竹や柴の垣。「日長籬落無人過」(范石湖「初夏」、『聯珠詩格』等漢詩に頻出。底本の「籬落」は誤り。漢詩ふうの句題。

蕉翁句集 卷之上 几董著

春之部

1 ほうらいの山まつりせむ老の春

安永四句稿
紫狐庵聯句集
五車反古・句帳

2 日の光今朝や鰯のかしらより

3 三椀の雑煮かゆるや長者ぶり

句帳

4 一羽の鶯があちらの生垣へ飛びこちらへ移りして楽しんで、多少の高低のある生垣も清らかである。『遠近山河浄』(李頎、『唐詩選』三)といった清潔感にあふれる理想郷を描いた秀作。乙は「小家がち」の止め方が老成、と賞揚した『発句手爾葉草』。

5 遠い鶯の声を聞くともなく耳にしているうちに、永い春の日もいつしか暮れてしまった。

「遠き」は声と日の両方へ掛かる。「遠き日」に春日遅遅たる夕暮の感じもある。鶯の声がいつまでも耳に残るような幽遠閑雅の世界。類句の「鶯に終日遠し烟の人」(安永五几童初懷紙)は、鶯と農人との疎遠なように親近な離俗境。

6 鶯の初音そのものを意識し、稚拙なその初音を「鹿(粗)相がまし」と軽妙に評した飄逸の作。次句と同じ明和八年の作。

◇鹿相がまし「鹿相」はそそっかしいこと。軽率。「がまし」(接尾語)は、……のきらいがある、の意。

7 いつもの雀かと思つてもみない時期、正調で鳴けない初音の頃である。春たけて鶯が珍しくないので見誤ったとする説もある。下五、簡にしている確な表現。

◇歟 疑問の終助詞。半ばその実を推定しようとする意に用いる。「和語の『か』は少し軽い」(皆川淇園『助辞詳解』)。

籬落

4 うぐひすのあちこちとするや小家がち

新選・純明鳥
落日庵・句帳

5 鶯の声遠き日も暮にけり

落日庵

6 うぐひすの鹿相がましき初音哉

明和辛卯春
落日庵

7 鶯を雀歟と見しそれも春

明和辛卯春
落日庵

一 「鶯宿梅」(季題)の図に賛したのであらう。

8 「勅なればいともかしこし鶯の宿はととはばい
かが答へむ」(貫之女、『拾遺集』、『大鏡』六)

の故事を逆用して、勅命を受けるほどの軒端の梅に、
鶯などの来鳴くのは、もったいなさすぎる、の意。
この絵は、梅は無難に描けていて、鶯が拙劣だったか。

9 どっしりとした比叡山を背景に、我が世の春が
来たとはかり、鶯が高らかに鳴く。

「うぐひすの高音あたらしき心地」(安永三年十二月廿
六日付書簡)と自讃した。比叡山(八四三メートル)
の大に均衡する小さい鶯の高音。「哉」止めがよく据
わっている。平明で朗らかな句。

10 一家揃って朝飯の膳につく頃になると、鶯がや
ってきて美声を張りあげて鳴く。毎朝の爽やか
な楽しさ。

平和な一家団欒の一時である。一句の意想は早春の清
爽感にあるから昼飯説はよくない。「飯時分」の語が、
昨日も今日も明日もという時間の継続性をよく表現し
作為性を感じさせない。

11 鶯が茨の茂みをサーッとくぐり抜けて、一きわ
高く飛び上がった。

鶯は一般に美声を賞されるが、動作も敏捷で軽快なの
を指摘した着想。この句に作意的技巧臭を見る人もあ
るが、当たらない。写実ふうの観察で「高う飛ぶ」に
の「高音」に対応する新味がある。

一 賛

8 うぐひすや賢過たる軒の梅

明和九春慶引

9 鶯の日枝をうしろに高音哉

10 うぐひすや家内揃うて飯時分

句帳

11 鶯や茨くぐりて高う飛ぶ

安永九儿重初懐紙
連句会草稿
句帳